

に合わせて変わってきました。しかし、忘れてはならないことも多々あります。二五周年を記念して刊行されたこのたびの年史を参考にしながら、これからの日文研の役割をしっかりと再考し、さらなる飛躍に挑戦していきたいと考えております。

今後心温かいご助言、ご支援を賜りたいと思います。

(国際日本文化研究センター所長)

## 二五年史座談会を企画して

瀧井 一博

日文研は本年二〇一二年に創立二五周年を迎えたが、それを記念して資料編と物語編の二冊の年史を刊行することになった。その編纂室長を拜命した私は、これを機に所員全員が参加して二五年を振り返り今後の展望を語り合う座談会を開催してはどうかと考え提案したところ、編纂室や所員会で賛同を得ることができ、昨年の二月から五月までの毎月一回のペースで会が催された。

この企画を立てた理由として、私が木曜セミナーの幹事も兼ねていたため、これが実現したらその分、木セミの配役に頭を悩ます必要がなくなるといふ邪な思いがあったことはまず正直に告白しておこう。だが、動機に多少の不純さはあっても、蓋を開けてみればこの企画は好評

だった（と信じたい）し、また二五年史編纂事業のそもそもの趣旨にも叶っていたものと確信している。

「そもそもの趣旨」とは、私の理解が正しければ、この年史編纂が単なる顕彰事業ではなく、新旧の世代交代を迎えるこれから数年間のなかで、日文研という組織の来し方という遺産を共有し、今後の行く末という将来構想を各人が熟慮する契機となるべきというものである。そういうわけで、計四回の会では、創設の経緯、共同研究、海外交流、収集資料というテーマで六、七名のスタッフを集めてざつくばらんに日文研の過去・現在・未来が語り合われた。各回には草創期からのメンバーと中堅若手とをブレンドすることに腐心したが、それは上記のような成立経緯に鑑みてのことに他ならない。

かのマックス・ヴェーバーは、師である古代ローマ史家テオドル・モムゼンと教授資格請求論文の公開審査で激論を交わしたが、その後モムゼンはその場に居合わせていた同僚たちに向って、「私はヴェーバー氏との議論を通して決して説得されなかったし、これからも自説を修正する必要を認めない。しかし、これからの斯学が彼を中心としたものとなるであろうことは認める」と述べたうえでヴェーバーに向かい、「若者よ、この槍を私に代って担え。これは私にはもう重すぎる」と語ったという。その逸話を思い起こし、内心どこかでそれに匹敵するような新旧両世代の激突が生じ、日文研の新たな歴史へのビッグバンが起こらないかと期待もした。そこにまでは至らなかったが、ところどころでジャブの打ち合いや見解の相違のスパークが発せられる瞬間はあり、それはこれから掲載される全記録のなかに推し量っていたのだ。

もっとも、総じて新世代は、世継物語を聞くかのようにお行儀よく耳傾けたというのが、実

情であった。それは、日文研の歴史を学ぼうという虚心坦懐な勉強心の表れか、あるいは諸先輩方の存在がかくも圧倒的ということなのか、はたまた単なる白けかそれとも今はまだ爪を隠しているだけなのか。その答えはここ数年のうちに出るだろう。その時が待ち遠しくもあり、また空恐ろしくもある。

(国際日本文化研究センター准教授)